

## 浅草らしさの抽出と景観作り

街並みファサードのしつらいとしての格子や駒寄（犬矢来）

Landscape and to make the extraction of Asakusa

Lattice and komayose (inuyarai) in Facades of streets

五十嵐恒治 Tsuneharu Igarashi (有)大寅五十嵐工務店

Daitora Construction Co.Ltd.

山田誠司 Seiji Yamada (株)三和工務店

Sanwa Corporation

萩原京子 Kyoko Hagiwara サンスター技研(株)

Sunstar Engineering Inc.

永田泰弘 Yasuhiro Nagata (株)カラープランニングセンター

Color Planning Center, Inc.

**Keywords:** 格子、駒寄、犬矢来、景観

性の確保などの景観向上に、どのような貢献ができるかを検討した。

### 1. はじめに

2007年度より環境色彩研究会にて、浅草三丁目界隈の環境色彩調査を行っている。この調査の一環として当地の景観を特徴づける要素の抽出を行った。本研究では、外壁ファサードのしつらいとしての格子、駒寄（犬矢来）に着目し、色彩素材・形状等を調査した。

浅草三丁目界隈、いわゆる花柳界といわれる地域においては、細目格子が主流である。堅子は細く、見付八分（24mm）程で、細く華奢なものが「いき」とされている。色彩としては、かつては柿渋の黒であったが、現在はEP塗装かOS塗装が主流となっている。素材としては、檜、杉が用いられたが、それもアルミ素材にとって替わっている。



**写真1 格子（細目格子と漆喰太格子） 浅草駒寄（犬矢来）**とは、本来、馬や牛を繋いでおく柵状の固定式のものをさしていたが、本研究では移動式駒寄である犬矢来に着目した。この機能の目的は①犬猫の粗相を防ぐため。②（軒下の犬走り）における雨宿りのお断り。③（雨天時の泥跳ねなどによる）外壁の保護。④防犯対策等、諸説ある。素材は圧倒的に竹が多いが、最近では建物の躯体コンクリート造に調和させてステンレス製のものや石材に合せたアルミ製のものなど、無機質のものも見られるようになった。

この結果をもとに、格子、駒寄（犬矢来）が「浅草らしさ」、「下町らしさ」の演出、街並みの連続



写真2 駒寄（犬矢来）竹製 向島

### 2. 浅草らしさの検討

そこで、まず、「浅草らしさ」とは何かを考察してみたところ①ノスタルジア（郷愁、望郷、回顧追憶）②ジャパネスク（日本的な、和調の）③ポピュラー（庶民の、大衆的な、流行の、人気のある）という三つの条件が導きだされた。

以上の三条件は「下町らしさ」という観点から言えば十分であるが、さらに「浅草らしさ」を追求すると、もう一つの重要な要素が浮上する。当地の花柳界という土地柄から「いき」の存在である。

「いき」とは、気質・容姿・身なり・色彩・柄などが洗練されていて洒落た色気があることをいう。この反対が「野暮」である。「文様」について見るならば、幾何学的図形、特に平行線による縞模様が「いき」とされた。以上の条件を満たした浅草三丁目の景観を特徴づける要素の抽出を行った結果が格子と駒寄（犬矢来）である。

### 3. 調査範囲

調査方法としては、浅草三丁目界隈の東西中心部（旧象潟一丁目町会）を中心に料亭、割烹、置屋飲食店に重点を置いてサンプル収集を行った。その理由として、伝統を受け継いでいる、地域の「らしさ」を形成する表の顔である、しきたり（広義の意味でパラダイム）を堅持していることがあげられる。また、今回の調査では、浅草と比較対照するために、同じ花柳界の向島三丁目、四丁目、五丁目界隈を比較の地域として定めてきた。

## 4.調査結果

割烹四軒は何かしらの形で格子が取り入れられており、料亭一軒は駒寄が施されている。店舗(寿司店、ふぐ料理店、蕎麦店、釜飯店等)においては、ほぼ全店窓格子が取り付けられており、1軒は駒寄も併設されていた。今回、浅草で調査対象となった約30軒のうち、2軒のみ太格子で、そのうち1軒は漆喰の格子である。やはり、木製の太格子は「いき」とはかけ離れた印象をもたらす。素材としては、ほとんどが木製であるが、検番(芸妓組合の事務所、芸妓の稽古場)はスチール製、割烹一軒はアルミ製である。一方、住宅に目をむけると、素材は逆転し、アルミ製が大部分を占めるようになる。

色彩からみた「いき」を語るに江戸時代からの和色、深川鼠、銀鼠、藍鼠、漆鼠等(灰色系)、黄柄茶、媚茶、千歳茶、煤竹茶等(褐色系)、紺色、藍色、木賊色、江戸紫等(青色系)の三系統色が挙げられる。「いき」な色とは区分されてはいないものの、黒が多いのは柿渋、灰渋の黒が使用されていた名残と推測される。今回の調査で木製の格子を見た限りでは、色相では5YR系、明度では5程度、彩度では4.5程度が中心であった。

アルミ製については、既製工業製品であるので、アルミ色、黒、ブロンズ、ゴールドにほぼ分類される。店舗は黒、住宅はブロンズが多く見られる。犬矢来を色相的にみた場合、素材(竹)の特徴からいって、表色系で表すには無理がある。若竹色、老竹色、柳煤竹、銀煤竹と日を追って変化していく色の無常観は日本人の感性に訴えかけるものがある。そこに「浅草らしさ」のひとつの要因になり得るものが潜んでいる。

形状的には特に決まった寸法はないが、市販されている既製品は高さ300mm~800mm、奥行き200mm~300mmというのが一般的である。軒下(犬走り)の奥行き、窓格子との兼ね合いにより、オーダーメイドの造りが要求される。

さて、この駒寄(犬矢来)であるが、浅草三丁目界限では、3軒しかサンプルが収集できなかった。当地においては、犬矢来より鉄平石乱貼りの腰壁が多く見られた。浅草でも一丁目、二丁目(雷門浅草寺周辺地域)の店舗においては数件の駒寄(犬矢来)が見出される。同じ花柳界の向島三丁目、五丁目界限では6軒ほどしつらえている。そこで、向島と比較検討しながら「浅草らしさ」についてさらに深く掘り下げてみることににより「格子」「駒寄(犬矢来)」がなぜ「浅草らしさ」に貢献できるのかが、明瞭になる。

浅草と向島の決定的な違いは、前者にはランドマーク的存在としての浅草寺・雷門があるが、後者にはその存在がない。また歓楽街として、あるいは観光地としての要素の有無も挙げられる。

相対的に比較するなら開放的：閉鎖的、革新的：保守的、派手：地味といった語彙に集約できると思われる。これは住民の意識としても反映する部分が見受けられる。向島においては観光客に媚びへつらうといった気風もみられず独自の文化、しきたりを重んじているといった気概があり、浅草よりも「いき」を感じさせる風潮が強い傾向がある。反面、「下町らしさ」という点では、浅草の方が上手である。「いき」というものが絶対的に必要なものではあるが、ややもするとそれは他を寄せ付けない排他的要素をも含む危険性があることを認識すべきである。

ここに「浅草らしさ」の本質が見出される。

一地域の繁栄と存続、非過疎化を考えた時、その住民が「いき」の堅持と観光地化というジレンマに陥ることは想像に難くない。因みに向島において観光客相手の飲食店はほとんど存在しない。

そこで「格子」と「駒寄(犬矢来)」の登場である。形状的に「いき」なしつらいであることは、前述した通りである。「格子」については菱や唐草ではなく、あくまで縦細目格子、「駒寄(犬矢来)」は竹製が望ましい。竹はその色の変化が無常観を訴えかける。外見的に「いき」を表現するにはこれ以上の適切な要素は他には見当たらない。観光地としてみた場合、そこには飲食、物品の購買、歴史的記念物の鑑賞のみならず、散策としての意味あいも十分に考えられることである。街並みにリズム感を与えることである。ゴシック様式にもみられるように縦目の線は間口の狭さを補完する。ただここで注意すべきことは、他の植栽との兼ね合いをも考慮することである。「格子」「駒寄(犬矢来)」の間に植栽を置くことにより景観にリズム感を与える可能性がある。

## 5.まとめ

結論として、「浅草らしさ」とは「下町らしさ」に「いき」を取り入れ、さらに観光立地としての条件が必要であることが分かった。そこに街並みファサードのしつらいとしての「格子」や「駒寄(犬矢来)」が「いき」を表現し、散策の場としての伝統的景観要素、素材あるいは色の無常観、街並みにリズム感を与えるという機能をも併せ持つことが分かった。このことから、これらの要素が「浅草らしさ」に貢献できるということが確認された。